

# 高州市郎さん

1921(大正10)年3月20日生まれ  
当時の本籍地 栃木県

陸軍 歩兵(擲弾筒)  
第33師団歩兵第214連隊  
ビルマ(インパール作戦など)



## ●1942(昭和17)年1月20日 歩兵第214連隊要員として宇都宮東部第36部隊に現役入営

・中国の蘇州で教育を受け、ビルマにいた原隊を追及

## ●1942(昭和17)年7月20日 ビルマ・ラングーンに上陸

- ・当時は一般的には親日的だった。駅に着いたくらいでもう「万歳、万歳」と現地人が喜んでくれた。
- ・イラワジ河流域の油田地帯・チョークで2期目の訓練。42度ぐらいになる所。幸い上等兵の候補に選ばれた。
- ・昭和18年1月ガンゴーに移動。5月パゴックへ移動して休養。
- ・英軍がインドに逃げる際渡河点に残した車が、部隊だけで2千両あった。ビルマから満州の関東軍へ送った。
- ・パゴックからカレワを超え小さな部落に駐屯してインパール作戦の準備をした

## ●1943(昭和18)年3月8日 インパール作戦 ヤサギョウを出発

・20日分の食料と弾薬、計30キロから35キロの荷物を背負った。そしてこういう山だからもう苦勞した。体力のない人は落伍してしまう。1人では立ち上がれないので、人に手をひっぱってもらったり手伝ってもらった。

## ●1943(昭和18)年3月11~13日 ピーコックの戦闘

- ・山砲隊が敵の陣地へ零距離射撃をした。何発か射撃が終わって敵がひるんだ時に今度は歩兵が突っ込む。
- ・出発時中隊は180人位いたのにこの戦闘でもう150人位になった。中隊でもその時50人ぐらい捕虜を捕まえた。
- ・私も山の中で1回捕虜を捕まえた。ポケットをみたら国を出る時にプラットホームで家族と一緒にとった写真を胸に持っていた。志願兵で19歳という。その写真を見たらかわいそうになって「部隊へ帰れ」って逃がしてやっちゃった

## ●1944(昭和19)年3月15日頃 トンザンの戦闘

- ・敵も負けて逃げていくわけではなくイーディムにいた部隊をインパールへさげる作戦で逃げている。
- ・マニプール河の橋を落とされて日本軍はトンザンのところでまごまごしていた。だから牟田口中将は「早く敵を追え、追撃しろ」と怒っていた。でも橋がないので渡れない。後方にいて考えることと実際の現場とは段差がある。マニプール河は断崖になっていた。縄梯子をかけて下へ降りて、工兵隊の小さい鉄舟に乗り移って対岸へ渡った。
- ・215連隊は本道を行き、私たち214連隊は右側のアラカン山系に入った

## ●1944(昭和19)年4月16日 「森の高地」(ビシエンプールの西)に出る

- ・森の高地では6中隊で約40人が死傷し、中隊は100人以下になってしまった。
- ・インドのシルチャールへ続く道がある。それを超えてインパールを目指し、シルチャール道を遮断する。
- ・食糧はもうなかった。そのころは現地で粃が支給された。だから鉄帽を臼にして、エンピ(シェベル)の芯について食べられるようにした。忙しい時は焼いて炒り米みたいにした。それでも足りないからそこらに生えている草を茹でて食べる。「泥水すすり草をかみ」って歌があるけどそのとおり。
- ・山だから沢に下りれば水はあった。だけど上流で馬が死んでいたり、兵隊が死んでいたり、また排便をするから衛生状態が悪い。だからアメーバ赤痢が発生する。そこへマラリア。終いには薬がなくなってしまう、マラリアとアメーバは病気のうちじゃなくなった。ケガをして足や、腕一本無くなった人が患者で、あとは患者の組に入れない。



## ●5月になり雨期に入る

・雨は降りだす、食いはなくなる。仕方がないので川に行き手榴弾で魚を取ったが、塩がないから食べられない。黒焼きにして、焦げるといくらか苦いからその苦みを味にして食べていた。ジャングルのそこらに生えている野草を炊いても塩気がないから食べられなかった。

・ビシエンプールを攻撃した時、いよいよ玉砕の状況になったために大隊長から連隊本部へ報告しろと命令されたW軍曹が連隊本部へ帰ってきた。そうしたら参謀が「貴様なぜ死んで来ないんだ」と怒鳴っている声が聞こえた。

・Mさんが「インド人のグルカ兵の肉食わせられちゃったんだ」と言う。大隊にいた仲間に焼いた肉をもらって食べた。「肉いるなら持ってけ。そこにアンペラ被ってあつから、それ削って持ってけ」。それで触ってみたら靴をはいていた。

## ●1944(昭和19)年7月5日 撤退

・命令をもらってもすぐに撤退はできない。後始末をしてから下がっていく。死んだ人の鉄兜を陣地のどこへならべて兵隊がいるように偽装したり、体の弱った人を一か所へまとめてさげたりしていた。

・体力がないから行き倒れていった。山の雨の降る中、腹が減ってる時、歩く。ぬかるみで靴が抜けまいようなところ入っちゃったり。ほんとに撤退作戦は悲惨だったですよ。ほんとにまさに地獄だったねえ。泥の中に埋まっていたのが亡くなっちゃったりね、動けなくなっちゃったり。車座で自爆していたところにも何回か出くわした。

## ●1944(昭和19)年9月 テディムに到着

・さがるまで2か月かかった。よその部隊から転属してきた Sさんがケガをした。その時に自分で腕を撃ったのはわかっていたが黙って治療してあげた。

## ●1944(昭和19)年11月3日 フォートホワイトで負傷

・腹部へあたって死んだ人もいたが、私は幸い足で、大腿部貫通だった。負傷した時は痛いと言うより何か熱い。出血多量で死んでしまうので自分で止血しなくちゃならない。その処置は自分でやった。

・怪我をした時、日本に帰れると思った。テディムには病院があったが、名前だけ。食物も米粒がやっとこみつかるぐらいのおかゆ。自分たちで自由に行動したほうが早い。病院から抜け出して、次の病院を自分で探しに行った。

・山砲の兵隊で口を貫通されて話ができない人がいた。だけど手足はなんともないから、その人と助け合った。

・カレワの病院まで歩いてさがった。いやあひどいものだった。幾日も何時間もかかって歩いた。途中ではもう死んで白骨になっているし、死臭で臭くて、道路がとにかくね。

## ●1944(昭和19)年11月10日ごろ 渡河点のカレワに着く

・カレワは弓以外にも、さがってくる部隊がごちゃごちゃしていた。いやあひどいものだったよ。もう病院に来た途端に駄目になったり。部隊が皆カレワを目指してぐわーっと来るので、人がいっぱい、浅草のお祭りみたいだった。

## ●1944(昭和19)年12月半ばごろ マンダレーに着く

・さらにサジという場所へ転送。そこから今度は前線で兵隊が足りないから、なんとかもう役にたつようになったら、後送じゃなく前送されることになった。健兵訓練所といって、衛生兵が中心になってなんとか動けるようになった兵隊をリハビリする施設に入れられた。

## ●1945(昭和20)年5月、モールメンに着く

## ●1945(昭和20)年8月15日、終戦。

・実際にわかったのは2日ぐらいたってからだった。

・それまでは戦闘をやっていたが、8月幾日になったら砲撃の音や飛行機の音がピシャーッと止まっちゃったんだよ。なんだか馬鹿に静かになった。おかしいなあと思ったら降伏した、受諾したっていうような連絡があった。

・モールメンからタイ国へ、ナコンパトナムの収容所に

## ●1946(昭和21)年6月2日 浦賀上陸、復員

(収録日:2018年6月16日)